

平成11年度ものづくり人材支援基盤整備事業に係る  
技術・技能の客観化、マニュアル化等

## 有田焼装飾技術に係る技術・技能

～「明日に伝える有田焼装飾技法」ビデオ補助テキスト～

平成12年2月

**中小企業総合事業団**

情報・技術部

## はじめに

本書はビデオ「有田焼装飾技術に係る技術・技能～明日に伝える有田焼装飾技法～」の補助テキストです。

ビデオで説明している各技法の手順やポイントを解説していますので、ビデオと合わせて利用してください。

平成 12 年 2 月

平成 11 年度ものづくり人材支援基盤整備事業

技術・技能の客観化、マニュアル化等

「有田焼装飾技術に係る技術・技能」

発行 中小企業総合事業団 情報・技術部技術振興第二課

〒105-8453

東京都港区虎ノ門3 - 5 - 1 虎ノ門37森ビル

TEL : 03-5470-1523 FAX : 03-5470-1526

このマニュアルは、大有田焼振興協同組合の協力を得て中小企業総合事業団が  
作成いたしました。  
Copyright © 2000 中小企業総合事業団 All right reserved

中小企業事業団は、平成11年7月1日付けで、繊維産業構造改善事業協会からの業務移管を行うとともに、中小企業信用保険公庫と結合し、中小総合事業団となりました。

## 目 次

### 有田焼製造工程おける装飾技法の位置づけ

- 1 有田焼の製造工程…………… 2
- 2 装飾を施すタイミング…………… 3

### 素地を飾る（第1巻）

- 1 印花（いんか）…………… 5
- 2 彫り（ほり）…………… 7
- 3 蛸手（ほたるで）…………… 9
- 4 貼付（はりつけ）…………… 10

### 絵を付ける（第2巻）

- 5 染付（そめつけ）…………… 13
- 6 和紙染（わしぞめ）…………… 15
- 7 吹墨（ふきすみ）…………… 16
- 8 釉薬（ゆうやく）のかけわけ…………… 18
- 9 上絵付（うわえつけ）…………… 20

### その他の装飾技法

- 10 イッチン…………… 23
- 11 型紙摺（かたがみすり）…………… 24
- 12 型紙刷毛目（かたがみはけめ）…………… 25
- 13 櫛刷毛目（くしはけめ）…………… 26
- 14 飛鉋（とびかんな）…………… 27
- 15 象嵌（ぞうがん）…………… 28
- 16 陽刻（ようこく）…………… 29

### 古陶磁にみる装飾技法…………… 30

- 1 染付果木文大鉢（そめつけかぼくもんおおばち）…………… 31
- 2 色絵龍虎文輪花皿（いろえりゅうこもんりんかざら）…………… 31
- 3 色絵花籠牡丹文八角鉢（いろえはなかごぼたんもんはっかくばち）…………… 32
- 4 染付透彫七宝繫文香炉（そめつけすかしほりしっぽうつなぎもんこうろ）…………… 32
- 5 青磁籠彫芋葉文皿（せいじへらぼりいもはもんさら）…………… 33
- 6 色絵貼付牡丹文瓢形水注（いろえはりつけぼたんもんひさごがたすいちゅう）…………… 33
- 7 染付吹墨菊文輪花皿（そめつけふきすみきくもんりんかざら）…………… 34

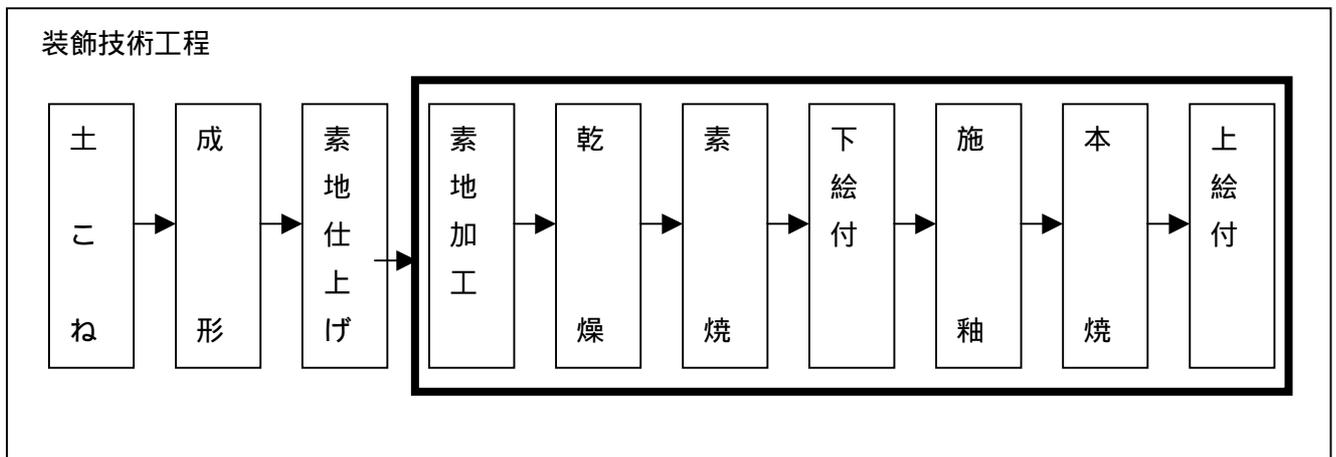
|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 8 青磁銹釉染付窓絵花文壺（せいじさびゆうそめつけまどえはなもんつぼ） | 3 4 |
| 9 色絵色紙孔雀牡丹文皿（いろえしきしくじゃくぼたんもんさら）     | 3 5 |
| 用語の説明                               | 3 6 |

【参考文献】

# 有田焼製造工程における装飾技法の位置づけ

## 1 有田焼の製造工程

磁器製造の全工程と装飾技術に関連する工程を示す。



### 土こね

磁器作りは、磁器の原料である陶石を砕いた陶土をこねることから始まる。製土工場で作られた陶土は、含まれている水分や土の粒が一定ではない。土こねは、水分や土の粒を均一にするために行う。

### 成形

陶土を製品の形に整えるのが成形である。成形には、このような口クロ成形の他、型に流し込む鑄込み成形などの方法もある。成形が仕上がったものを「素地（きじ）」と呼ぶ。素地は皿板に乗せ、生乾きになるまで乾燥させる。

### 素地仕上げ

素地が生乾きになると、素地仕上げを行う。削りカンナで、素地の表面を削って、高台も削り出す。次に水拭き仕上げは、素地の表面を滑らかにするために清潔なお湯を使い、木綿布で丁寧に拭く。

### 素地加工

生乾きの素地に、装飾を施していくことを素地加工という。素地加工を施す技法として「印花（いんか）」「彫り」「貼付（はりつけ）」をビデオで紹介している。

### 乾燥

変形やヒビが生じないように、3日から4日を目安に時間をかけてゆっくりと乾燥させる。素地は、大きさは3%～4%縮み、水分が2%～2.5%以下になる。

### 素焼（すやき）

素焼は、素地の中から水分を完全に除き、固めるまでに行う。温度は880 ～ 920 で、8 時間～12 時間くらいの時間をかけて焼き、それと同じくらいの時間をかけて冷ましていく。

### 下絵付（したえつけ）

素焼した素地に絵を描くことを下絵付という。

### 施釉（せゆ）

素焼の素地に釉薬をかける。これを施釉といい、本焼をする前に、十分乾燥させる。

### 本焼（ほんやき）

本焼はおよそ1300 の高温で24 時間焼き、およそ3 日かけて冷ます。大きなものはさらに長い焼き時間が必要になる。

### 上絵付（うわえつけ）

本焼したものに、色絵具を付けていくことを上絵付という。絵具には、赤・黄・青・緑・金・銀など多くの種類があり、絢爛たる色彩は有田焼の大きな特徴のひとつである。

## 2 装飾を施すタイミング

装飾技術を大きく分けると、次の3つのタイミングがある。

- (1) 素焼きまへの生乾きの時。
- (2) 素焼きのあと。
- (3) 本焼のあと。

#### (1) 素焼きまへの生乾きの時

印花、彫り、蝋手、貼付、型紙摺、型紙刷毛目、櫛刷毛目、飛鉦、象嵌、陽刻

#### (2) 素焼きのあと

染付、和紙染、吹墨、釉薬のかけわけ、イッチン

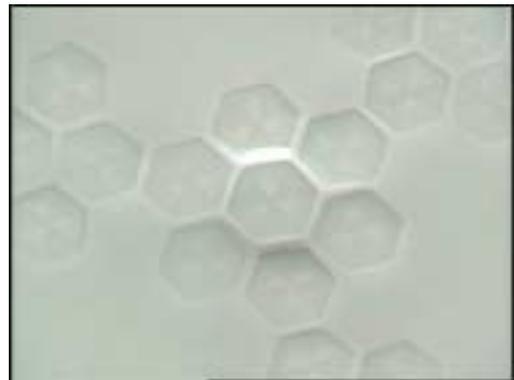
(3) 本焼成のあと。

上絵付け

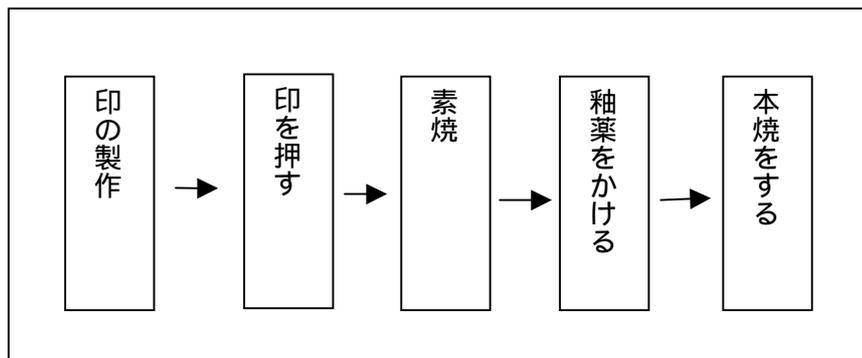
素地を飾る（第1巻）

## 1 印花（いんか）

印花は、成形後、素地が柔らかい内（3分乾き）に印を押して文様を作る技法。



（1）製作手順



< 説明 >

### 印の製作

印の素地は、押した時土離れがよく、しかも崩れにくいことが条件である。素地と同じ陶土や石膏などがよく用いられる。

### 印を押す

印は、素地が柔らかいうちに押さなければならない。押す直前には表面に水分を与えておく。ひとつひとつ深さにムラがないように、均等に押していく。この技法の一番大切なことは素早く仕上げることである。

素焼

釉薬をかける

模様の凹凸をどこまで出すか、釉薬の厚みが鍵を握っている。

本焼をする

## (2) 補足

### < 印花の発生 >

ひも作りの捻土（ねりつち）のつなぎ目を板ゴテで叩いて絞めるが、この板ゴテに線をいれておくと土離れがよく自然に文様ができる。印花はこのように自然発生的に起こり、次第に工夫されてきたものと思われる。

縄文土器の縄文は板ゴテのかわりに縄をまいた棒で叩いたものである。

### < 道具 >

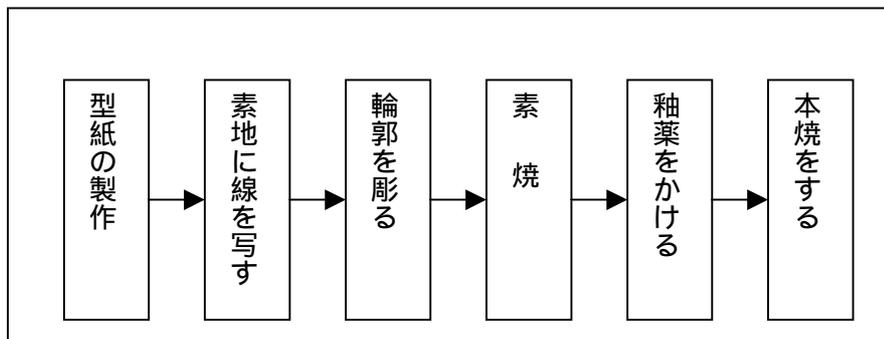
印判（木判、石膏判）、自然物（石、木の葉）、レース

## 2 彫り（ほり）

彫りとは、文字通り素地を直接彫りつけて、模様を描き出していく技法。



### （1）製作手順



#### <説明>

##### 型紙の製作

和紙に墨で下絵を描く。墨は瓢箪墨（ひょうたんずみ）と云われる墨を使う。

##### 素地に線を写す

この型紙は素地に絵柄を写すため、仲立紙（なかだちがみ）と呼ばれている。素地に絵を写すには、セロハン紙などの滑りのよいものを使う。仲立紙の上を擦りながら絵柄を素地に写していく。

##### 輪郭を彫刻

彫りには、カンナを使う。作り手は、各々が自分で使いやすい形にして使っていく。刃先を様々な角度で使い分けることで、彫りの表現を豊かにしていく。まず、花びらなどの輪郭をひとつひとつ彫っていく。絵柄全体を素地から浮かび上がらせることができる。全体の輪郭が出ると、一度刷毛で素地の表面に水分を与える。表面が乾いていると、微妙に削っていくことができないためである。

## 素焼

彫り終わった素地は、十分に乾燥させて素焼する。

## 釉薬をかける

## 本焼をする

## ( 2 ) 補足

### < 彫りの種類と特徴 >

- |                              |   |
|------------------------------|---|
| 線彫り                          | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 凹線をじかに素地に彫りつける技法。</li><li>・ 適度の柔らかさが必要。硬い素地（乾燥素地）に彫れば線が欠けて独特な味の線となる。</li><li>・ 彫り道具。<br/>刀(カミソリの刃)、ヘラ、釘、竹など。</li><li>・ 釘彫り、へら彫りがある。</li><li>・ ロクロ線彫りは線彫りの繰り返し。「千段」「千筋」ともいう。</li></ul> |
| 沈彫り<br>( 深彫り )               | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 文様自体を素地の面より沈んで見えるように彫ったもので、特に深く彫ったものを深彫りという。</li><li>・ 沈彫りを行う素地は磁器のものが比較的多い。<br/>磁器は七分乾き、陶器は五分乾きのときが彫り頃。</li><li>・ 道具<br/>線彫りカンナと曲り(線彫りした中を「さらえる」)カンナ。</li></ul>                      |
| 浮彫り<br>( 片切彫り )              | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 素地から文様が浮いて見えるように片切彫りに彫ったもの。特に鋭い彫りを必要とする場合は、鋭利なナイフで縦に線を彫り、文様の外側を斜めに削いでいく。</li><li>・ 道具<br/>曲りカンナ、木ヘラ</li><li>・ 浮彫のコツは浅く彫って強く文様を浮き出させることにある。経験と熟練を要する。</li></ul>                        |
| 透し彫り                         | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 素地を彫り透かす技法。</li><li>・ 文様を透かす場合と反対にバックを透かして文様をより効果的にする場合がある。</li><li>・ 道具<br/>鉄製の錐や槍カンナで彫る。(七分乾き)<br/>「ポンス」で文様を打ち抜く。(三分乾き)<br/>サンドブラスターで素焼素地を彫る。</li></ul>                             |
| 螢手<br>( ライパター )<br>( ライチャ付 ) | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 透かした部分に釉(粘りのある釉薬)をつめて焼いたもの。</li><li>・ 文様が光を通して柔らかく沈んで見えるところに独特の美しさがある。照明具等に最適である。</li></ul>   |
| 櫛目                           | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 生素地や化粧掛けした素地に、櫛目のもので引っ搔くようにして描く線彫りの一種で、平行線の線彫り。</li><li>・ 生乾きのタイミングをはずさずに行う事が必要で、軽く一気に描</li></ul>   |

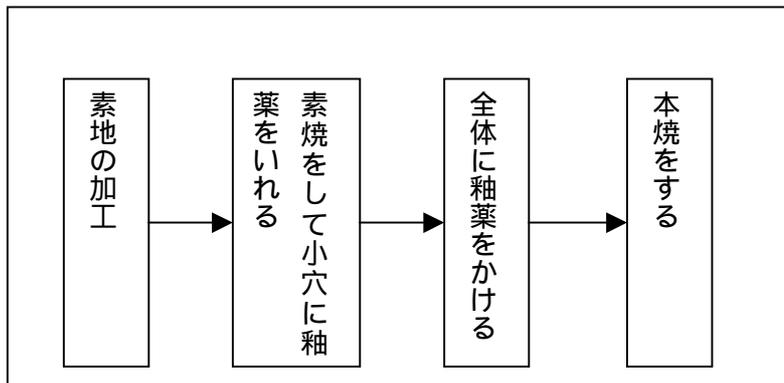
- く。
- ・ 文様は普通の平行線、波形、渦、点線など道具の用法によって異なる文様出来る。
  - ・ 道具  
竹を櫛目にした竹櫛、つげぐし、帯金（鋸のように目立たした道具）

### 3 蛍手（ほたるで）

蛍手とは、素地を文様の形に透かし彫りでくり抜き、その穴に釉薬を詰めて焼いたものである。透かし彫りの文様が透けて見えるのが味わいとなっている。



#### (1) 製作手順



#### <説明>

##### 素地の加工

小穴をあける。

##### 素焼

素焼後、小穴に釉薬をいれる。

##### 釉薬をかける

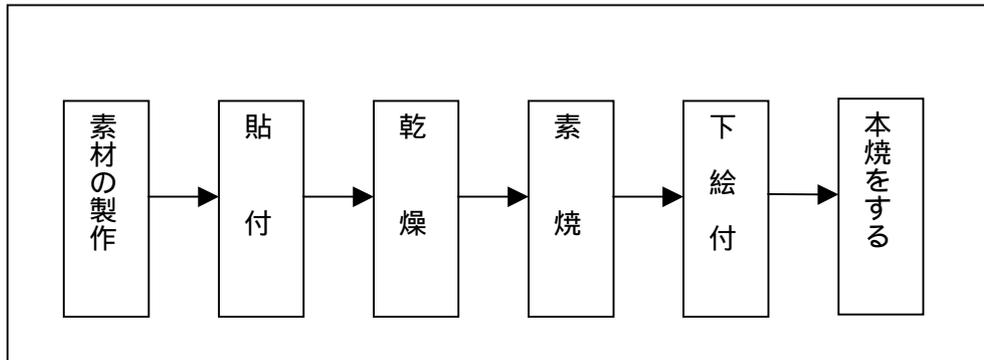
##### 本焼をする

## 4 貼付（はりつけ）

貼付とは、素地に素材を貼り付けて意匠を形作る方法



### （１）製作手順



### < 説明 >

#### 素材の製作

水分を多量に含んだ泥漿(でいしょう)といわれる素地素材を型に流し込んで陶板を製作する。貼付に必要なベースとなる素地を製作する。ビデオの場合ベースは陶板本体である。

貼り付けていく素材を製作する。ビデオの場合木蓮の花びらを製作している。湿った布で覆い、乾燥しないようにする。

小さな花びらなど細かい部分は、貼付直前に作るため、素地の塊から製作する。

素地を水で薄く溶いた泥漿で接着する。

素地を貼り付ける前に、本体に直接必要な装飾を施しておく。枝に細かな凹凸を入れたり、葉に葉脈を彫り入れる。

#### 貼付

貼り付ける素地は、水で表面を滑らかにする。また、素地本体の貼り付ける部分にも、水を塗って接着しやすいようにする。

花びらに泥漿を塗って素早く貼り付ける。

接着部分についた指の跡を水を含んだ刷毛で消す。

素地が柔らかいうちに、迅速に作業を進めていくことである。

#### 乾燥

風の当たらない日陰で乾燥させる。全体がゆっくりと、同じ速度で乾燥しているか確認する。

#### 素焼

#### 下絵付

素焼した後で、下絵付をし、本焼をする。

#### 本焼をする



## 絵を付ける（第2巻）

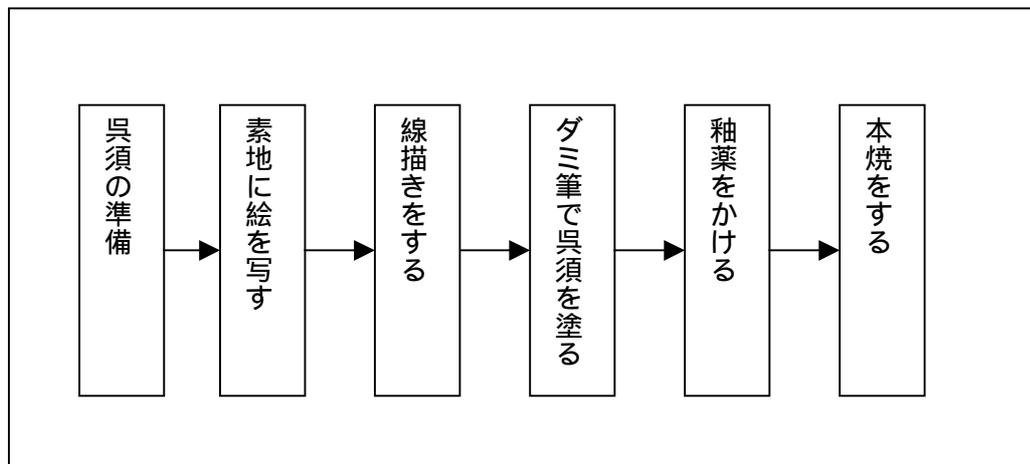


## 5 染付（そめつけ）

染付とは、白い地肌に青色の文様が描かれた技法。



### （１）製作手順



#### < 説明 >

##### 呉須（ごす）の準備

染付には、まず線描きに用いる呉須を準備する。下絵が剥げないようにするためにアラビアゴムを混ぜて水で薄める。

##### 素地に絵を写す

仲立紙を使い、絵柄を素地に写す。

##### 線描きをする

##### タミ筆で呉須を塗る

地の部分を塗るには、タミ筆といわれる太い筆を使用する。タミ筆は、鹿の毛で出来た筆で、これを呉須に含ませて素地に乗せていく。

ダミ筆から少しづつ呉須を流しながら、必要な分量だけ素地に染み込ませていく。素焼の素地は水分を吸うのが早いため、素早く絵付けしなければならない。

ダミ筆は、出す呉須の量を房( -13- )イドのように微妙に調節することで決めていく。

また、呉須は濃度を一定に保つために、攪拌しながら使う。

花びらが重なっているような場合、立体感を表現するために、花びらの先端はそれぞれ色が微妙に薄くなっている。これは、「ぼかし」という技法を使っている。まず、筆に呉須を染み込ませてから、筆先に水を少し含ませる。この方法を用いると、まず薄い呉須が出て、その後濃い呉須が続き、奥行きのある表現が可能になる。

釉薬をかける

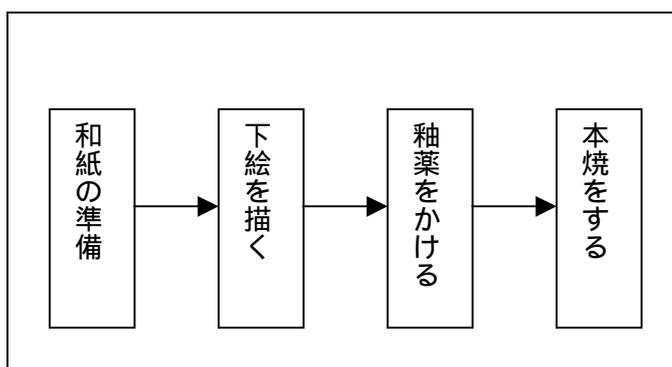
本焼をする

## 6 和紙染（わしぞめ）

和紙染とは、呉須を素地に置いた和紙に染み込ませることで模様を描く方法。絵具を重ねることで、色彩の繊細な濃淡を表現することができる。



### （１）製作手順



#### < 説明 >

##### 和紙の準備

和紙には、吸水性がよく、破れにくいものを使う。

##### 下絵を描く

意図は模様の下絵を付けておくために、正確な下書きを行う。

ピンセットで和紙を置き、呉須を染み込ませていく。この製品の場合、使う呉須の種類は全部で9種類。ひとつひとつ正確に呉須を乗せる。

呉須の色調は変化しやすいため、どんなに複雑な文様でも始めると最後まで休むことなくいっきに呉須を乗せていく。

釉薬をかける

本焼をする

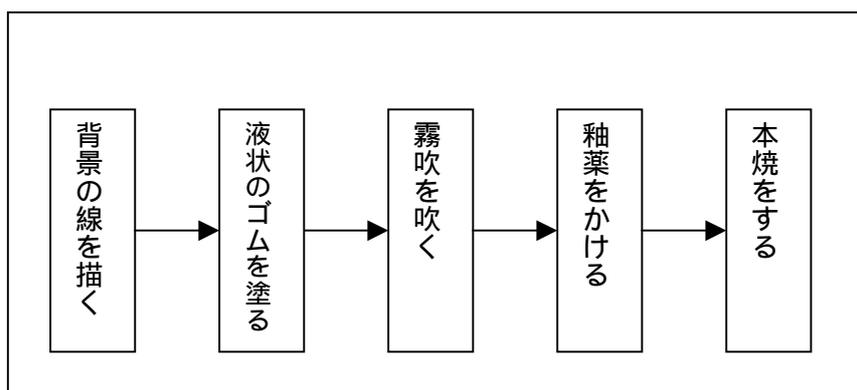
## 7 吹墨（ふきすみ）

-15-

吹墨とは、呉須を霧吹で吹きつけることで模様をつける技法。



### (1) 製作手順



< 説明 >

背景の線を描く

霞んだ背景に抜ける部分の線描く。

液状のゴムを塗る

の部分（呉須をかけない部分）に液状のゴムを塗り、液状ゴムを乾燥させる。

霧吹を吹く

呉須が正確に当たるように吹きつける。

釉薬をかける

液状ゴムを剥がし、釉薬をかける。

本焼する

（ 2 ） 補足

-16-

< 吹墨の道具 >

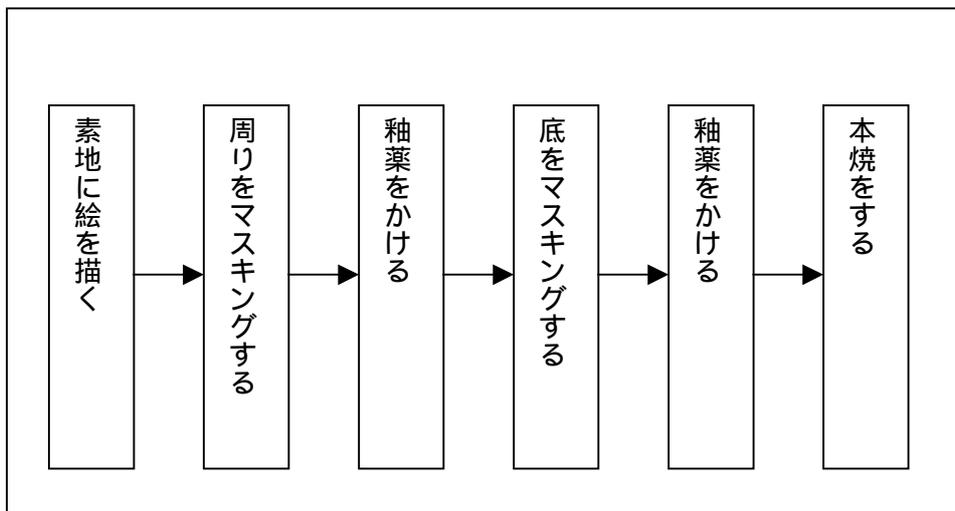
呉須、霧吹、液状ゴム（型紙の代用）

## 8 釉薬（ゆうやく）のかけわけ

この青磁は、内側の底だけが染付になっており、青の文様が入っている。底とそれ以外の部分は種類の違う釉薬が用いられている。このような技法を釉薬のかけわけ技法という。



### （１）製作手順



#### < 説明 >

##### 素地に絵を描く

初めに底の部分の模様を描く。複雑な文様の同じ製品を多く作る場合、ゴム製のスタンプを用いている。

線描きをし、ダミ筆で塗る。

##### 周りをマスキングする

マスキングには、吹墨の時にも利用した液状のゴムを使用する。

回転させながら、底以外の部分にゴムを塗る。

##### 釉薬をかける

底の部分に釉薬を掛け、ゴムを剥がす。底以外についた釉薬を水できれいに洗

いとる。

底をマスキングする

-18-

底の部分にゴムを塗る。

釉薬をかける

全体に釉薬を掛ける。

底の部分のゴムを剥がし、釉薬の境目をきれいに削る。そこに水で白の釉薬を薄めたものを塗る。2つの釉薬の層の間に空気が入っていると、素地に釉薬がうまく付かなくなるためである。

本焼をする

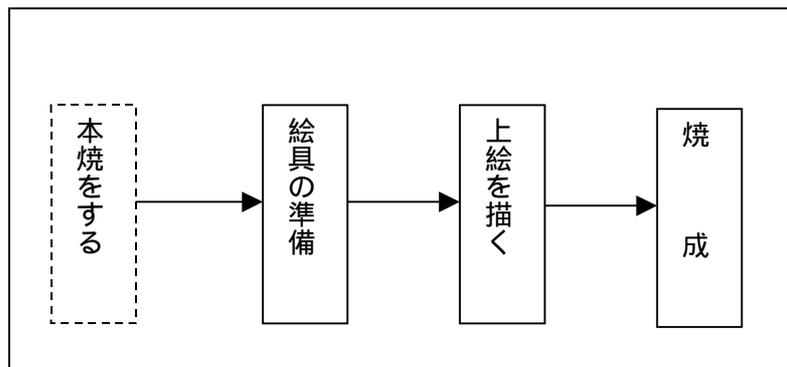
## 9 上絵付（うわえつけ）

-19-

上絵付とは、釉薬をかけ本焼した後の素地、すなわち釉薬の上から絵模様を描く技法



### （１）製作手順



< 説明 >

#### 絵具の準備

上絵具には、和絵具と洋絵具があり、その数は60種類にも及ぶ。和絵具は、絵付けする焼成前と焼成後とでは色彩が異なる。従って、焼成後の色彩バランスを考えながら絵付けしていくことが重要である。

粉末絵具に、フノリと水を適量混ぜて調合する。フノリは描いた絵具がある程度の厚みを持つようにするために使う。

#### 上絵を描く

上絵付は、染付同様まず線描きをし、その後で地の部分を塗っていくため、ま

ず線描き用の絵具を調合する。

模様の輪郭を描く線描きには、面相筆を使う。

この製品の場合、線描きは花の輪郭の赤と木の輪郭の黒と2種類の色を使う。

面を塗るダミ筆は、下絵付で用いたものよりかなり小さくできている。

-20-

線描きの時と同じように  
準備する。混ぜるニカワの量は、線描き用の場合より少なくする。

この花びらの赤い絵具だけに洋絵具を使用している。これは、花びらに濃淡を付けるためである。

和絵具は、筆先を振ることで、絵具を少しずつ下ろしながら、塗っていく。和絵具は、ある程度厚みがないと発色しないため少し盛り付けるように塗る。

線描きされた上を塗る場合には、穂先で絵具を流し、可能な限り、筆先そのものを素地に触れないようにして塗っていく。

この繊細な筆使いがあって、初めて絢爛な色彩の色絵が完成できる。

#### 焼成

絵付が終わると、本焼よりも低温のおよそ780～830 程度で焼く。

#### <注意>

ビデオでは、赤い絵具の上に、金の絵具を絵付けした鉢も紹介している。このような場合は、金を発色させるために、更にもう一度焼成にすることが必要である。

## その他の装飾技法

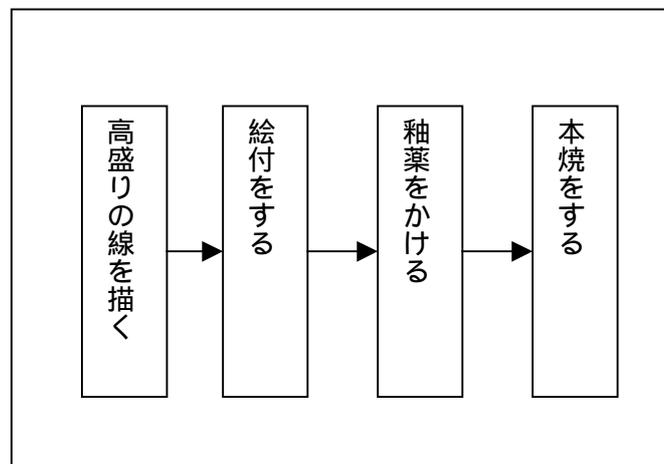


## 10 イッチン

カップと呼ばれる強い繊維の袋に口金具を付けたイッチンに、化粧土・泥漿・釉などを入れ、線文様を描く。イッチン盛ともいう。



### (1) 製作手順



#### <説明>

高盛りの線を描く

素地の上に泥漿で高盛りの線を描く。

絵付をする

ダミ筆で呉須を塗る。

釉薬をかける

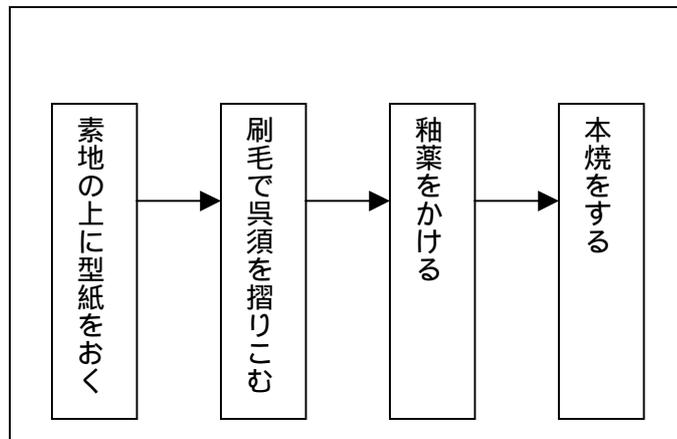
本焼をする

## 1 1 型紙摺（かたがみすり）

絵柄を切り抜いた型紙の上から絵具を塗り、絵を表わすので、同文様のものを量産できる。江戸時代前期から始まり、明治時代の染付で多用されたが、銅版転写の出現で衰退した。型絵・型紙絵付ともいう。



### （ 1 ）製作手順



#### < 説明 >

素地の上に型紙をおく

刷毛で呉須を摺りこむ

釉薬をかける

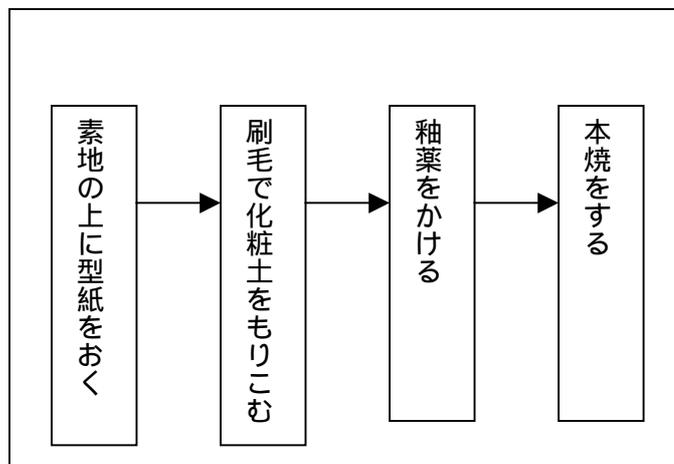
本焼をする

## 1 2 型紙刷毛目（かたがみはけ）

絵柄を切り抜いた型紙の上から刷毛で絵具を塗り、刷毛目と型紙で表現したもの。



### ( 1 ) 製作手順



#### < 説明 >

素地の上に型紙をおく

刷毛で化粧土を盛りこむ

釉薬をかける

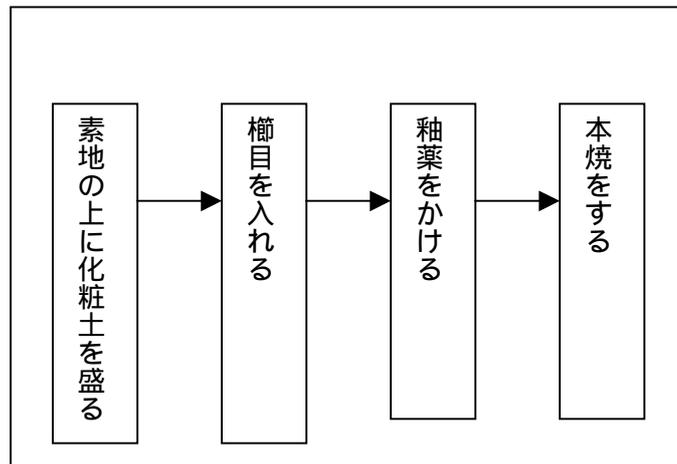
本焼をする

### 1.3 櫛刷毛目（くしはけめ）

素地の上に化粧土を盛り、櫛で刷毛目を入れたもの。



#### (1) 製作手順



#### <説明>

素地の上に化粧土を盛る

櫛目を入れる

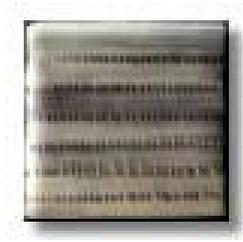
釉薬をかける

本焼をする

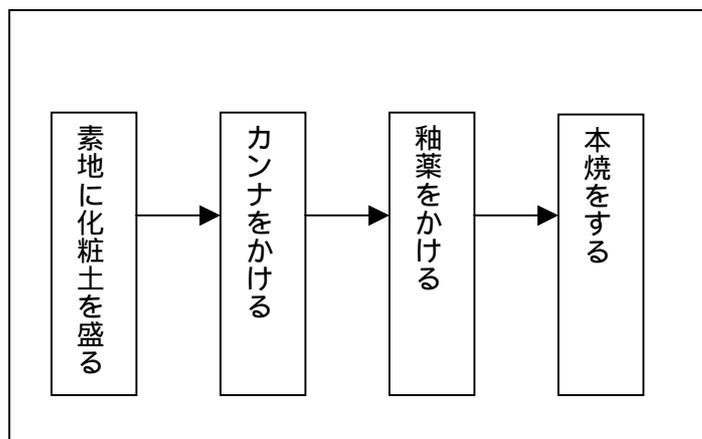
-26-

#### 14 飛鉋(とびかんな)

ロク口の回転を利用し器物を削るさいに、鉋の当たる角度によりはね上げられて飛び飛びにできる削り模様。中国磁州窯や日本の各地で行う。飛白文・躍篋(おどりべら)・撥篋(はねべら)ともいう。



##### (1) 製作手順



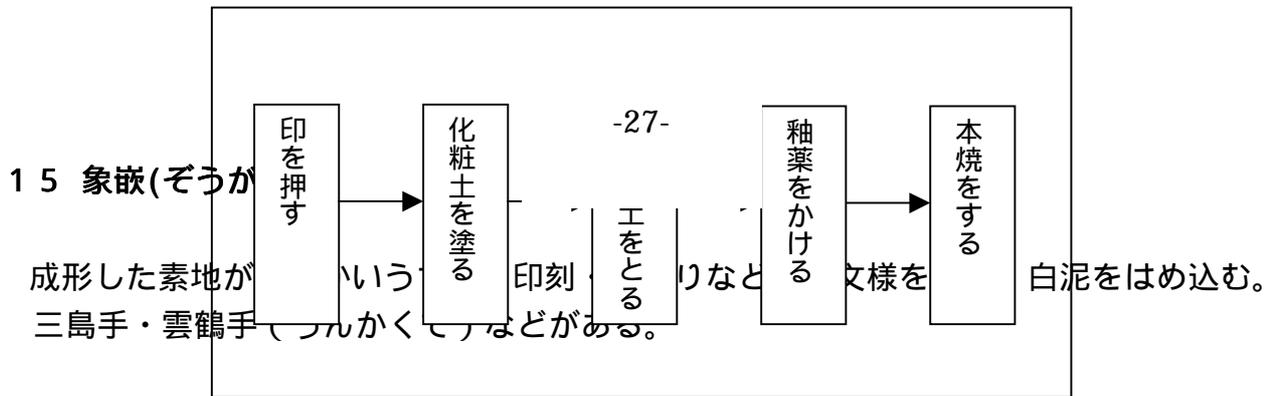
<説明>

素地に化粧土を盛る

カンナをかける

釉薬をかける

本焼をする



(2) 製作手順

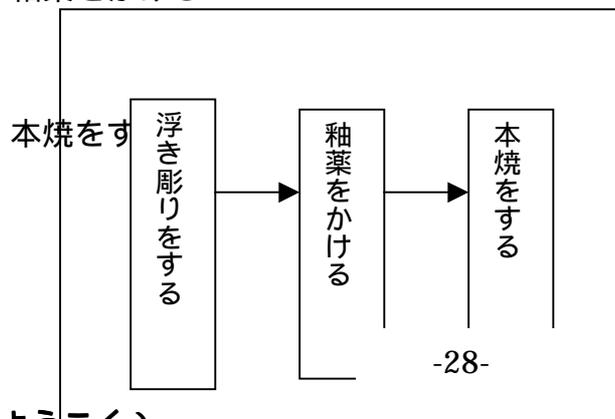
<説明>

印を押す

化粧土を塗る

余分な土をとる

釉薬をかける



## 16 陽刻(ようこく)

素地の上に文様を浮きうたたせるように表現したもの。



### (1) 製作手順

< 説明 >

浮き彫りをする

釉薬をかける

本焼をする

## 古陶器にみる装飾技法

1. 染付果木文大鉢（そめつけかぼくもんおおばち） 「初期伊万里」



2. 色絵龍虎文輪花皿（いろえりゅうこもんりんかざら） 「柿右衛門様式」



3. 色絵花籠牡丹文八角鉢 (いろえ ぶんはっかくばち) 「古伊万里様式」



4. 染付透彫七宝繫文香炉 (そめつけすかしぼりしっぽうつなぎもんこうろ) 「彫り」



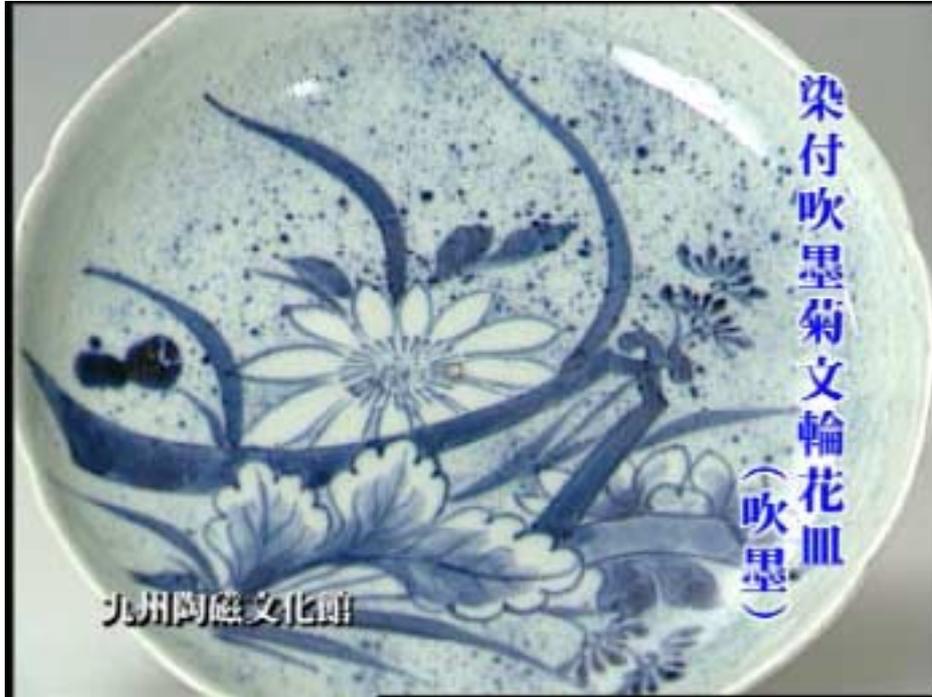
5 . 青磁籠彫芋葉文皿 (せいじへら | さら) 「彫り」



6 . 色絵貼付牡丹文瓢形水注 (いろえはりつけぼたんもんひさごがたすいちゅう) 「貼付」



7. 染付吹墨菊文輪花皿 (そめつけろ んりんかざら) 「吹墨」



8. 青磁銹釉染付窓絵花文壺 (せいじさびゆうそめつけまどえはなもんつぼ) 「釉薬のかけわけ」



9 . 色絵色紙孔雀牡丹文皿 (いろえしき

ぼたんもんさら)

「上絵付」



- あ -

- 赤絵 赤を主とする多彩の上絵付。色絵ともいう。赤はやや低い温度で焼き付けられ、緑、黄、紫などはフリットを用いる。中国では宋赤絵がその先駆で、元末から明初にかけて景德鎮で染付とともに焼かれるようになり、嘉靖年間（1521～66）には完成期を迎える。日本では伊万里に始まり、古九谷・京焼などで焼かれた。赤絵には金彩を加えたものを金襴手、赤以外の色合いも鮮やかなものを錦手、染付と組み合わせたものを染錦ともいう。
- イッチン（描） 装飾法の一つ。カップと呼ばれる強い繊維の袋に口金具を付けたイッチンに、化粧土・泥漿・釉などを入れ、線文様を描く。イッチン盛ともいう。
- 印花（いんか） 印花とは、素地の柔らかいうち（三分乾き）に、印判を押して文様を作る技法。
  - ・ 発生 ヒモ作りの捻土のつなぎ目を板ゴテで叩いてしめるが、この時板ゴテに線を入れておくと土離れがよく、自然に文様ができる。このように自然発生的に起こり、次第に工夫されてきたものであろう。縄文土器の縄文は板ゴテの代わりに縄を巻いた棒で叩いたもの。
  - ・ 道具  
印判（木判、石膏判）、自然物（石、木の葉）、レース
  - ・ 李朝三島手。高麗青磁の雲鶴手。
- 浮彫り（片切彫り）
  - ・ 素地から文様が浮いて見えるように片切彫りに彫ったもの。特に鋭い彫りを必要とする場合は、鋭利なナイフで縦に線を彫り、文様の外側を斜めに削いでいく。
  - ・ 道具  
曲りカンナ、木ヘラ
  - ・ 浮彫のコツは浅く彫って強く文様を浮き出させることにある。経験と熟練を要する。
- 上絵付（うわえつけ） 赤、緑、黄等の多彩な上絵具を低火度で焼き付ける。しかし一般に、鉛が入っている為、酸に弱く剥げやすい欠点がある。

- か -

- 貝高台（かいこうだい） 高台の底面に貝殻の痕があるもの。窯詰（窯積）の古い方法で、熔・を防ぐため器物の下に貝殻を置いて積み重ねる貝殻積の痕跡。朝鮮系の陶器に多い。

## 用語の説明

|                   |  |
|-------------------|--|
| 型紙摺絵<br>(かたがみすりえ) | 装飾技法の一種。絵柄を切り抜いた型紙の上から絵の具を塗り、絵を表わすので、同文様のものを量産できる。江戸時代前期から始まり、明治時代の染付で多用されたが、銅版転写の出現で衰退した。型絵・型紙絵付ともいう。   |
| 型作り               | 型に粘土を押し当てて成形すること。型抜ともいう。型には木型・陶型・石膏型・土型などがあり、使われ方により外型・内型・責型に分けられる。使う粘土が板状であれば、タタラ作りになる。   |
| 櫛目                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生素地や化粧掛けした素地に、櫛目のもので引っ搔くようにして描く線彫りの一種で、平行線の線彫り。</li> <li>・ 生乾きのタイミングをはずさずに行う事が必要で、軽く一気に描く。</li> <li>・ 文様...普通の平行線、波形、渦、点線など道具の用法によって異なる文様が出来る。</li> <li>・ 道具<br/>竹を櫛目にした竹櫛、つげぐし、帯金（鋸のように目立たせた道具）</li> </ul> |
| 呉須（ごす）            | 呉州とも書く。酸化コバルトを含んだ鉱物で、染付(青花)に用いられる顔料。藍色に発色する。中国では椀花・石花青などともいい、回青・蘇麻離青(そまりせい)などは中国に輸入された時の名称である。このほか、陶磁器の顔料を呉須と称する場合や、明後期から末期の民窯で焼かれた粗雑な磁器のことをいう場合もある。   |

- さ -

|         |   |
|---------|---|
| 磁器（じき）  | 土器・陶器が粘土を主原料とし土物(つちもの)と呼ばれるのに対し、陶石や石英・長石・粘土質物を主原料とする磁器は石物と呼ばれる。焼成は最も高火度で行われ、1400度を越えるものもあり、透光性があり、強度は最も強く、吸水性はほとんどない。多くは釉薬をする。日本での磁器生産は17世紀の伊万里に始まるが、中国では後漢代には青磁が作られている。                              |
| 透し彫り    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 素地を彫り透かす技法。</li> <li>・ 文様を透かす場合と反対にバックを透かして文様をより効果的にする場合がある。</li> <li>・ 道具<br/>鉄製の錐や槍カンナで彫る。(七分乾き)<br/>「ポンス」で文様を打ち抜く。(三分乾き)<br/>サンドブラスターで素焼素地を彫る。</li> </ul> |
| 素焼(すやき) | 釉薬をする前に、本焼より低い700度から1000度くらいの温度であらかじめ焼成すること。強度と吸水性が増し、施釉や下絵付がしやすくなる。  |

- 青花(せいか) 白磁の釉下にコバルトで絵付をした磁器。中国では青花、日本では染付と呼ぶ。固い胎土の素地にコバルト(呉須)で文様を描き、透明釉を掛け高火度で焼成すると白地に鮮明な青の文様が浮かび上がる。元代には濃厚な青で複雑な文様を表わしたものが多く、明・清時代には赤絵とともに主流となり、主に江西省の景德鎮(けいとくちん)に官窯が設けられ、永楽・宣徳年間(1402～35)には様式・技法ともに洗練された作風を作り上げている。
- 青磁(せいじ) 青い釉の掛かった高火度焼成のやきもの。素地と釉薬に含まれた微量の鉄分が還元焰焼成により淡青色・青緑色・暗緑色に呈色する。酸化焰焼成による黄褐色のものも含むことがある。殷周時代の灰釉陶器を源流とし、漢末・三国時代・浙江省越州窯で原始的な最初の青磁である古越磁が作られている。宋代には龍泉窯をはじめ耀州窯・北宋官窯などでさかんに作られた。中国以外では朝鮮半島で高麗青磁が作られたほか、日本、ベトナムでも作られている。
- 線彫り
  - ・ 凹線をじかに素地に彫りつける技法。
  - ・ 適度の柔らかさが必要。硬い素地(乾燥素地)に彫れば線が欠けて独特な味の線となる。
  - ・ 道具。  
刀(カミソリの刃)、ヘラ、釘、竹など。
  - ・ 釘彫り、へら彫り
  - ・ ロクロ線彫り...線彫りの繰り返し。「千段」「千筋」ともいう。
- 象嵌(ぞうがん) 装飾技法の一つ。成形した素地が柔らかいうちに、印刻・線彫りなどで凹文様を付け、白泥をはめ込む。三島手・雲鶴手などがあ

- た -

- 濃(ダミ) 下絵付は、吸水性のある素焼素地又は生素地の上に描くので運筆が非常に困難である。特に、広い面を塗る場合ムラが出来やすい。「ダミ筆」という特殊な水筆を用い、適度の絵具を十分に含ませて、塗るというより、むしろ流す様にして描く。濃淡の表現には筆先に少々水をつけてぼかす方法がある。これを「ホカシダミ」とか「つけダミ」と呼ぶ。
- 沈彫り  
(深彫り)
  - ・ 文様自体を素地の面より沈んで見えるように彫ったもので、特に深く彫ったものを深彫りという。
  - ・ 沈彫りを行う素地は磁器のものが比較的多い。  
磁器は七分乾き、陶器は五分乾きのときが彫り頃。
  - ・ 道具  
線彫りカンナと曲り(線彫りした中を「さらえる」)カンナ。

|               |   |
|---------------|---|
| 陶器(とうき)       | やきものの総称として土器・器・磁器を含めて使う場合もある。狭義の陶器は粘土を主原料とし、焼成温度は土器より高いが磁器より低く、非透光性、多孔質で、1%未満の透水性がある。その多くは施釉されている。日本では須恵器がその最初のものといえることができるが、その概念は必ずしも明確ではない。 |
| 陶石(とうせき)      | 磁器の原料。石英粗面岩という火山岩が熱水作用を受け、長石などが粘土化し、亜硫酸ガスなどの作用で鉄化合物洗い流されたもの。日本では有田泉山陶石の発見が最も古く、天草陶石などがある。   |
| 飛鉋<br>(とびかんな) | 装飾技法の一種。ロクロの回転を利用し器物を削るさいに、鉋の当たる角度により撥ね上げられて飛び飛びにできる削り模様。中国磁州窯や日本の各地で行う。飛白文・躍篋(おどりべら)・撥篋(はねべら)ともいう。   |

- な -

|                     |   |
|---------------------|---|
| 仲立紙<br>(なかだち<br>がみ) | 同じ文様を繰り返し描くための下図用の型紙。<br>引きの強い和紙に瓢筆墨と呼ばれる墨で描き、乾燥後、椿の葉など肉厚葉にて上からこすり、素地(素焼、生素地等)に文様を写す。この墨は焼成時に燃えてしまう。  |
| 錦手(にしきで)            | 赤・緑・黄・紫・青などのフリットを用いた上絵の具で磁器に上絵付をしたもの。色絵・赤絵のことであるが、主に伊万里のものに対して用いる。上絵のなかで赤色はやや低い温度で付けられる。この赤の色彩の多いものは赤絵、多彩な色合いのものを錦手と呼び分けることもあり、染付と組み合わせられたものは染錦と呼ばれる。 |

- は -

|                        |   |
|------------------------|---|
| 貼付け<br>(メダル付け)<br>(貼花) | <ul style="list-style-type: none"> <li>別型でレリーフ文様を起こし、それを器の表面に貼付ける技法。</li> <li>貼付けのとき、文様と素地の硬さ(乾燥)が同じでないと、剥がれたり、ヒビが入ったりする。</li> <li>貼付けは立体文様であるため食器には不向き。装飾品には豪華で効果が大きい。</li> <li>貼付けで最も精巧で有名なものは、英国ウェッジウッドの製品で、一般に「カメオ」「ジャスパー・ウェア」と呼ばれるものがある。</li> <li>唐三彩にも貼付けは多く使われている。丸型文様であるので、特にメダル付けと呼ぶ。</li> </ul> |
| 瓢筆墨(ひょうたんずみ)           | 昔は瓢筆を焼いて墨を作っていたが、現在では桐炭を細粉にして使用している。瓢筆の墨がより微粒になることから使用された。  |
| 吹墨(ふきずみ)               | <ul style="list-style-type: none"> <li>型紙を置き、それに竹筒の「スイノウ」に絵具(呉須)を塗って口で吹き付けたもの。墨を吹き付けたような変り色があるものをいう。</li> <li>中国の古染付、有田の初期伊万里瀬戸の油皿。</li> </ul>  |

螢手  
(ライパター)  
(ライチャ付)

- ・ 透かした部分に釉（粘りのある釉薬）をつめて焼いたもの。
- ・ 文様が光を通して柔らかく沈んで見えるところに独特の美しさがある。照明具等に最適である。

彫り

彫り文様とともに彫るときの土の柔らかさが大切である。  
線彫り、沈彫り、浮彫り、透し彫り、蛍手、櫛目を参照。

- ま -

無鉛上絵具

平成元年佐賀県窯技センターが開発（特許取得済）。  
その後商品化されて、現在業界に普及中である。

- や -

洋絵具

着色材に融材を加えたもの。  
不透明性、水及び油解き、薄く施しても充分発色、生色と  
焼成後の色が同じ、ボカシの具合がよく細画に便利。  
明の粉彩や豆彩、洋食器に使用。  
金泥、金箔、金液、銀液、カスター等もある。

- わ -

和絵具

透明なガラスの粉末に着色材を加えたもの。  
ガラス質、透明性、水解き、厚く施す、生色と焼成後の色が違う。  
明の赤絵、古伊万里、柿右衛門、京焼、九谷焼で使用。  
溶剤として膠（ニカワ）を使用する。